

Title	クレルーキア考(二)
Sub Title	Kleroukhia : some aspects of the Athenian colonial expansion in the fifth century B. C. (II)
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.85(583)- 96(594)
JaLC DOI	
Abstract	For centuries ancient Greeks sent many overseas colonies to extend incessantly their world. It is clear that the colonial activity was one of their basal ways of life. With this in view, the kleroukhia, a peculiar type of the Athenian colonies, that flourished especially in the fifth century, should be considered under the light of the contemporary political development of Athens. The present paper surveys every evidence concerning the problem of kleroukhia, referring to the discussions of Ehrenberg, Blunt, Graham and others about it. The following two themes are treated in detail: At first, what were the differences between the kleroukhia and other types of the contemporary Athenian colonies ? After all the theory must be maintained that kleroukhioi were the only colonists with full Athenian citizenship. Next, what did the kleroukhia for Athens ? Answering this would lead us to a better understanding of the Periclean politics.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クレールーキア考 (二)

真 下 英 信

三

以上五世紀アテナイの設立した *Klērōukhia* の場所及び年代に關して諸説を検討したわけであるが、ではこれらの植民市はどのような目的、理由によって設立されたものであろうか、この点を次に述べてみよう。

前述のように *Klērōukhia* も *Apoikia* などと同じく植民市の一つの形態であるので一般に植民市としての共通な性格があると推測されるがはたしてこのことは実証されうるであらうか、この問題をまず検討せねばならない。

ところで一般に第二次植民活動の根本原因として商業への関心並びに人口増加による土地獲得、いわば食糧を求めてなされた点が指摘されている。^① アテナイは他のポリスと異なり第二次植民活動には加わらなかったと言われており、^② その原因に關しては不詳であるが、他のポリスが植民活動をほとんど止める頃になってから植民を始めている。この事実はアテナイが所謂第二次植民時代に於いて人口が土地面積に比して相対的に少なかったことによる

クレールーキア考 (二)

の可否か確言は出来ないが、六世紀末に於いて確かに人口が増加したことは推定されうる。五世紀初めの人口動態は明らかでないが、Solon の時に Salamis をとれなかったアテナイは四七九年 Herodotus の伝えを信じれば Megara の三〇〇〇の兵に対して八〇〇〇の重装歩兵を出している。^③ この事実は兵力の増加、言易れば人口増加を反映しているとみて大過なからう。又當時のアテナイの食糧特に穀物供給状況はどのようなものであろうか。この点も史料が殆んどみられず不明である。しかし六世紀初め既に Solon が Attica より穀物の輸出を禁じていること、^④ Attica は昔から土地が貧しいので有名であったことなどの点からみてその状況は特に良好であったとは思われない。他方四世紀に於いても Attica は自国の必要量の半分しか穀物を自給出来たのみであり食糧供給の議事が各 Prytaneia ごとに論じられていること、^⑤ 穀物が正当な価格で売られるべく穀物監督官 (*αγορανομός*) が設けられていたこと^⑥ などからして常に穀物が不足の状態にあったとみる事が可能のように思われる。

従がって五世紀に於いてもペルシア戦争による国土の荒廢^⑦及び

人口増加により前後の六、四世紀と同様に穀物は不充分の状態にあったと想像される。このことは五世紀中頃「エジプト王」Psamathecos がアテナイに穀物を贈与している点にも反映されていると思われる^⑧。又五世紀後半アテナイが貿易中心地であったことは、アテナイが穀物を多量に輸入せねばならなかった事態にも起因していたと考えられる。

人口増加及びそれにとまなう穀物の輸入の必要性というこの事実を考えながら植民市の設立された地域をみてみると面白い一つの現象がみられる。Eubolia, Chersonesos として Lemnos は皆小麦やオリーブの産地として有名な所であったのである。五世紀に於けるこれらの島や半島での穀物生産額は不明であるが、Michell の試算によると、四世紀末に Attica が大麦小麦それぞれ三六・三万、三・九万メデイムノス産出しているのに対して Lemnos は二〇・五万（うち小麦五・七万）、Imbros は七・〇万（うち小麦四・四万）、Scyros 三・八万（うち小麦〇・九六万）メデイムノス産出している^⑨。特に Eubolia は産出額不明であるがアテナイの穀物供給地として重要な役割を果たしていた。アテナイはこの島の Chalcis に早くも六世紀末に Klérroukhoi を送っている。又 Melos もその沃地は有名であった^⑩。確かにアテナイがこれらの地点に直接穀物支配を目的として Klérroukhoi を送ったという史料は何も伝えられてはいない。しかしペロポネソス戦争の時、Sparta に侵入され自国の農地を荒されたアテナイにとって Eubolia はアテナイの穀倉地の役割を果たしており、又四一一年

の Eubolia の喪失によるアテナイの損害は特にこの豊かな麦と土地の点にあったといわれており穀物生産地支配と Klérroukhoi 派遣とが関係していたと推測される。Eubolia には古くから Chalcis と Eretria の間に所有を争われた沃地 Lelantina 平野があった^{⑪A}。五〇六年 Chalcis に送られた Klérroukhoi はこの平野より貴族を追放して入植したのであった。又アテナイの或るデーマゴグはアテナイの市民が得られるせいぜい五メデイムノスの大麦のかわりに Eubolia からの五〇メデイムノスの小麦を市民に約束しているが、この事実からもアテナイが Eubolia の穀物に多大の関心を持っていたことが知られよう。

さらに Eubolia は穀物生産地としてのみでなく黒海方面からの穀物輸入ルート上にあり、Chalcis, Eretria, Hestiaia は Pontos, Macedonia など北エーゲ海支配に重要な役割を持っていた^{⑪B}。そして黒海に至るルートを鎖のように結んでいるのが Scyros, Lemnos として Imbros である。この方面に於いて Cimon は早くも四七五年 Scyros に Klérroukhoi を送り海賊を征伐して航海の安全をはかっている^{⑪C}。アテナイはこの頃より急にエーゲ海北部に関心を示し始めたわけではなく既に六世紀から黒海方面からの穀物輸入上、この地方に関心を持っていた。だがイオニアの反乱とそれに続くペルシア戦争によりこれまで黒海方面に力を持っていた Miletos, Megara が後退し、代ってアテナイがこの地に一層発展する機会を獲得したのである^{⑪D}。特に四五四年エジプトに於いてアテナイがペルシアに敗北を喫してから北エーゲ海支

配は黒海よりの穀物輸入の為に一層大きな比重を持つに至ったと考えられる。

ところでアテナイのこれら一連の勢力拡大が直接の原因であったか俄に断定できないが同じ四五〇代より漸次小アジア方面において Erythrae, Colophon 及び Miletos の反乱等に示される如き反アテナイ的な動きが見られる。この反乱の動きはデロス同盟内部の問題のみでなく外からの特にペルシアの対ギリシア政策とも関連していたと考えられるがそれはともかくとして Lemnos, Imbros そして Naxos, Andros への Kleroukchoi 派遣は丁度この頃であった。この事實はしかし単に穀物輸入ルートの問題ではなく、アテナイとその同盟国との関係の変化と密接に関連していると思われるが、この点を考察する前にまず Kleroukchoi を送ることがどの位アテナイにとって「利益」になったかを明らかにせねばならない。

一体 Kleroukchoi が五世紀に何名程送られたか又各々の κλῆρος^⑮の面積がどの位であったか全く推定の域を出ることは出来ない。ここでは五世紀後半ではあるが比較的良く知られている Lesbos の場合を考えてみよう。

Lesbos 島は反乱に失敗した後、Methymna を除き三〇〇〇の κλῆρος^⑯に分割された。I κλῆρος^⑰の大きさは Gomme の計算によると四五ヘクタールであり当時ギリシアの土地所有額としては比較的大きなものであり、これは Glotz の見積りによると大体 Zeugitai の所有額の二倍である^⑱。Lesbos 人はアテナイの入植

者に対して年二ムナの地代を払うことにより耕作することが許されたが、この二ムナという額は大体重装歩兵として仕える Zeugitai の最低収入であった^⑲。

ところで入植者としてどんな身分の人々が入ったのであろうか。この点に關しても何ら伝わっていない。しかし Apolkoï の場合ではあるが四四六年 Brea への植民法令をみると植民者は Zeugitai と Thetes 階級に限定されているので Kleroukchoi の場合も同様であったと推定される。ところで彼等入植者は植民地で得る収入により重装歩兵として出兵するに最低の収入が保証されるのである。従がって Thetes 階級は入植することにより Zeugitai 階級に位する収入を得ることが出来、同時にその階級に応じた義務として重装歩兵として出兵せねばならなかった^⑳。こうしてアテナイは下層市民を入植させることにより彼等の収入を増加せると同時に兵力を増強することが出来たのであった。ところでこれら Kleroukchoi の送られた地点は多くデロス同盟の成員国であり特に反乱を起した地点であった^㉑。従がって κλῆρος^㉒の考察にあたっては穀物輸入という面のみでなくアテナイとデロス同盟との関係をも検討せねばならない^㉓。

Kleroukhia 設立が下層市民の救済に役立つことが以上の結果で明らかにされたが植民の貧民救済という性格はギリシア植民史全体に通ずる一側面である。ところがアテナイは Kleroukchoi を特に四五〇〜四四〇代に多く送っている。この点に注目して次の考察をすすめるなければならない。

Kleroukhos という語は κλῆρος, ἔκκω の両語より合成されたのであり、^{②③}このポリスで作成されたかは不詳であるが、ギリシア人が異民族に対して行使してきた征服権利—征服地を自己の世襲地に合併する権利—をギリシア人に対しても適用したという面があったのであり κληρουχία は征服植民市又は Kolonien mit rein politische Landanspruch と呼ぶことができる。^{②④}事実 Kleroukhia の軍事的な性格は Aegina における設立理由や Chalcis, Lesbos, Chersonesos 或いは Melos の場合においても明示されている。如様な性格とアテナイとデロス同盟成员国との関係の間ほどの様な接点があったのであるうか。

ここでデロス同盟の所謂帝国化という問題は割愛せねばならないが、四六〇年代既に Naxos が、又四六五年には Thasos が離反を試みていることからわかるようにアテナイとデロス同盟国との対立は早くから存在し又同盟の性格も漸次変化を受けて来た。^{②⑤}特に Thasos の場合、金鉱と商業基地の帰属問題がアテナイとの争いの原因となっているように、北エーゲ海での Cimon の Eneahodoi への植民にみられるアテナイの北方での発展が、直接同盟国との利害の対立を生じさせたと言える。またその後四五年アテナイがエジプトで敗北した頃よりしだいに小アジアで不安定な状態が発生したことは前に述べた。これらの反乱の動きに対してアテナイは以前より一層圧政的な態度を持って臨んだことは反乱後に締結された条文からうかがえる。^{②⑥}四五〇年には Naxos, Andros などと Lemnos とエーゲ海の各島に Kleroukhoi

が送られたのも小アジアの不穏な動きに関連した同盟国支配強化の為であったと思われる。Andros は Salamis の戦の後アテナイに包囲されており、又 Karystos も四七二年初めて強制されて同盟国に入ったのでアテナイに対して好意的であったとは思われない。^{②⑦}これらの同盟国の一連の不穏な動きは Cimon がオストラキスモスによる追放を解かれた後アテナイに帰って来てから、ギリシア人同志が対立しているのを避ける為にギリシア人をキプロスに向かわせたという伝えやアテナイ人が Euboeia に噛みついたと伝えている話の裏にも反映されている感がある。^{②⑧}この点について Plutarch は明らかに同盟国支配の為に Kleroukhoi が送られたと述べている。^{②⑨}特に Cimon の死後 Pericles はペルシアと和平条約を結び同盟設立以来の帝国化の動きを完成させ、明確に同盟支配の強化に向かっていた。スパルタの反対により開催する事に失敗したパンヘラス会議の後、アテナイは同盟金の一部を神殿建築や海軍の設立に流用し、さらに度量衡統一法令を出し政治的経済的にも支配体制を確立しようとした。^{②⑩}さらに貢賦金徴収強化の為に四四七年 Kleiniās の法令を出し、^{②⑪}その上初めは宗教的な意味のみであったパンアテナイアへの奉納も改めてアテナイへの奉納として同盟国に義務付けさせた。^{②⑫}

こうしたアテナイの支配政策に全ての同盟国が沈黙していたわけではない。Callias の平和の成立により同盟存続理由がなくなつたと考え離反していく国があった。この動きを封じる為に送られたのが Kleroukhoi であった。たとえば四四七年、Boiotia が

反乱を起した時、外部特に Euboea の反アテナイ勢力が Boiotia を援助するのを防止するために Tolmides は Euboea に Klérourkeoi を送っている。同様に Euboea が反乱した時には Pericles により反乱鎮圧の手段として Klérourkeoi を派遣を行なっている。当時アテナイが同盟国に対して一層高圧的な態度で臨んでいた事は反乱後 Chalcis や Colophon などと締結した条約に明白に読みとれる。同盟国支配の強化は内に於いてのみでなく外に対しても取られた。Pericles は Chersonesos に Klérourkeoi を送り外敵の侵入に備えるとともに植民市の強化を計ったのである。

以上アテナイと同盟国との関係は Naxos, Thasos の反乱に始まりしだいに君臣的色彩をおびて来、そしてこの傾向はペルシアとの和平成立後、より明白なものとなった。ここに於いて同盟国はアテナイの庄政をのがれるべくして離反を試みたが Pericles は Klérourkeoi を派遣してこの反乱を鎮圧していった。一口に言えば同盟国支配の軍事的手段として取られたのが Klérourkeoi の派遣であった。Chalcis, Eretria, Hestiaia 及び Lesbos と皆反乱後 Klérourkeoi が派遣されている。こうした Klérourkeoi の派遣が同盟国に如何に反感をもつてむかえられていたかは第二次アテナイ同盟の条文にアテナイが Klérourkeoi を同盟国に送ることを禁ずる一条文がみられる点からもうかがえる。

同盟の帝国化はアテナイの対外政策に於いてのみでなく内においてもその変化の関連がみられる。四六二年 Ephialtes の改革によりアテナイの民主制は急速に完成に向かったが、この源は

Themistocles による大艦隊の設立にあったのであり、アテナイはこの大艦隊をもってギリシア世界での制覇に成功した。ところで軍制は政治制度と密接に関連している。すなわちアテナイの大艦隊の主力である Thetes 階級、言易えれば Salamis の勝者が民主制を確立したのであった。この大きな動きの中で、後のアテナイの発展に役立つ強力な布石を敷いた Cimon もその寡頭的な性格の故に追放されることになった。だが寡頭派も沈黙していたのではなく Thucydides を立て Pericles の同盟金の流用を非難したが彼自身も追放される結果となった。Plutarch は、四五〇〜四四〇の多くの植民市設立は Pericles の政敵と争う上での人気取り政策の一つであったと伝えている。彼の記述の史料としての信頼性に関しては多くの問題がある。しかし、Pericles の日当制の導入、アルコン職の Zeugitai への解放など所謂民主的な政策は、単に軍事的価値のみでなく海軍人口の強化を意味した Peiraeus とアテナイを結ぶ大城壁の工事や神殿建築を同盟金を流用して行い市民に収入の道を与えた政策と同一線上にあったことは確かである。ここに我々は Pericles の外に対しては同盟支配、内においては同盟支配に基づく民主制の確立を求めた政策、一口に言えば彼の内政と外交の一致点を見ることが出来る。従ってデロス同盟の帝国化は Pericles の内外の政策から必然的に強化されたのであり、Klérourkeoi の派遣はここに於ける一つの政策であったといえる。

こうしたアテナイの自己拡大の性格は又母市より全く独立した

ポリスを形成したとされる *Apoikia* の設立にも反映している。^⑤
Amphipolis はアテナイに税を払っており、アテナイの造船用木材の重要な供給地であったのである。^⑥ *Brea* の場合もアテナイとの密接な関係が示されている。植民市設立指導者は前の時代の如き絶対的な権限を *Brea* の場合持つていなかった。確かに条文によると植民市設立指導者は全権を持って植民市設立にあたるように述べられているがそれは名ばかりであった。まず第一に国家が既に誰が植民すべきかを定めており、又土地分配者がアテナイの各々の *Phylai* より選出されているが、このことは彼等がアテナイの役人という性格を持っていたのではないかという疑いを呼び起させる。^⑦ 又西方のイタリアに於いても *Apoikia* が作られている。アテナイは既に 458/7 年 *Egesta* と 四五〇年頃には *Legion*, *Leontini* と条約を締結し自己の勢力の拡大を試みている。^⑧ そして 444/3 年には西方での拠点として *Thurii* を設立している。^⑨ この植民には全ギリシアから人々が加わっているが常にアテナイの利益が第一に考えられており *Pericles* の西方での発展政策の遂行という目的を所有していたのであった。^⑩ さらにアテナイは反乱地点支配の為に *Apoikoi* を送っている。*Erythrae*, *Colophon* の場合がそれである。^⑪

Kleroukhia 設立にみられるアテナイの帝國的な性格は *Apoikia* 設立の場合にも反映されており、言易えればアテナイ国家の利益を第一に考えて *Apoikia* が作られており前時代とは異なった性格が示されている。アテナイの同盟国支配、即ちギリシア世

界での制覇の動きは *Apoikia* を *Kleroukhia* 的に屈折させたと言えよう。

注

- ① 植民原因として主にこの二つが上げられている。二者択一的な態度でもって原因を求めることは出来ない。 *Bengtson*, p. 89. cf. *Schaefer*, p. 369. n. 3. 簡単な史料の見通しについては *Bengtson*, loc. cit.
- ② *Bengtson* はこの通説を疑問視している。cf. *Busolt*, p. 759. *Ehrenberg*, p. 221. しかしアテナイは暗黒時代より六世紀まで他のポリスと異なった状態にあったことは確かであろうである。(Hopper, p. 209~210.)
- ③ *Hdt.* IX. 28.
- ④ *Plut.* Sol. XXIV. *Solon* の時代に既に穀物を輸入せねばならなかったようである。(Bengtson, p. 122). *French*, *JHS*, 1957, p. 237~246.
- ⑤ *Thuc.* I, 2. もっともオリーブを栽培し穀物を輸入するといふ土地の利用により、土地の荒れていたことが直に五世紀の状態と結合する考えに少し問題があるかもしれないが。cf. *Car-penter*, *R. Discontinuity in Greek Civilization*. Camb. 1966, p. 66.
- ⑥ *French*, *Growth of the athenian Economy*. London, 1964, p. 118, 176. [*French*.]

- ⑦ All. 43. 4; 51. 3. *οιροφολακτές* について Busolt. p. 431. 1119. 参照。
- ⑧ Thuc. I. 89, II. 16.
- ⑨ Plut. Per. XXXVII. 4. 并びに關しては Gomme. I. p. 329.
- ⑩ Michell. The Economics of Ancient Greece. Camb. 1963. p. 50.
- ⑪ Wagner. p. 34.
- ⑫ Thuc. VIII. 95. 96.
- ⑬ Thuc. I. 15; Hdt. V. 99.
- ⑭ Hdt. V. 77.
- ⑮ Aristoph. Vesp. 715~718.
- ⑯ アテナイ海軍の主力であった三段櫓船はその構造上速度を第一としてゐる為に多くの限定を受け船員の寝食する場所の余裕もなかったので寄航できる多くの基地が必要であったのである。この欠点は又作戦にも利用された (Thuc. VIII. 95, Xen. Hell. II. i. 21~27.) について Adcock. F. E., Greek and Macedonian art of War. 1957. p. 27~.; Gomme. A. W. A forgotten Factor of Greek naval Strategy. JHS. 1933~.; Amit. M. Athens and Sea. 1965. p. 53~ 参照。 <ポリス時代のことであるが Chalcis は Corinth などと並んでギリシアの重要なところであった (Pol. XVIII. 11) 並びに Chalcis の重要性があらわになっている。>

- ⑭ 2章参照
- ⑮ French. p. 85~.
- ⑯ cf. Grundy. G. B. Thucydides and the History of his Age. I. London. 1948. p. 178.
- ⑰ Thuc. III. 50.
- ⑱ Gomme. II. p. 326~327. したがって全体的な土地改革を受けたのが明確である。 Glotz. G. Ancient Greece at Work. London. 1926. p. 247 によれば Zeugitai の土地所有は穀物畑として三〇~五〇ヘクター (ca. 12~20ha.) である。 cf. Beloch. 12. p. 302~303. 一般にギリシアでは土地は細分化される傾向にある Solon, Peisistratus 皆々 Attica は一層この傾向が強まり (Busolt p. 781~782) 四世紀末の土地平均所有額は 4 ha であった (Busolt. p. 180.)
- ⑲ Jones. p. 31. n. 49. 50; Gauthier. p. 74~. cf. Gomme. II. p. 327. したがって Gomme, Wagner. p. 23~ によれば地代以外の収入の可能性を認めよう。
- ⑳ IG. 12. 45. I. 39~42. ἐς δὲ [B] πέαν ἐκ θέρων καὶ ζε[υ] [υ] γερῶν ἔσθαι τὸς ἀπὸ [i] κοῦ.
- ㉑ RE. XI. p. 823.
- ㉒ Jones. p. 168~169. cf. Frost. 論文 (Historia. 1964. p. 285).
- ㉓ Melos 島に關しては貢賦金を払っていたのかどうか IG. 12 97 へ Thuc. の記述をめぐり議論があるが Peloponnesos 戦の開戦当時 Melos は中立をたもっていたと思はれる (Beng-

tsou. p. 232.). しかし最近又 Raubitschek. A. E. は Melos 島は中立国でなく貢賦金を払っていたとする説を述べている (Historia. XII. 1963. p. 78~83.)

②③ 上段を参照

②④ Liddel-Scott. Greek-English Lexicon. S. V. Klérroukhos.

②⑤ RE. XI. p. 817, 815. cf. Wagner. p. 1., 彼はアテナイが Klérroukhos という植民の型を作ったとしている。

②⑥ Naxos 反乱の年代は不詳。ATL. III. p. 244~p. ca. 470年 となっているが確かなのは四六〇年代前半とさえただけである (Bengtson. p. 188.)

Meiggs は四四九年の Callias 平和をもってテロス同盟が帝国化した年代としているがすでに早くより同盟国との対立が存在していた点を見逃がすわけにはいかない。従って帝国化は漸次生じたものであるのが正しく、この見解は又 Thuc. I. 97. 2 の記述に一致するものである。Schaefer. Die attische Symmachie im zweiten Jahrzehnt ihres Bestehens. 1936. p. 23 ~24. (頁数は彼の論文集による) Gomme. I. p. 282. Bengtson. p. 207.

②⑦ Thuc. I. 100.2; ATL. III. p. 258.

②⑧ Thuc. I. 109. 1~. ヒシプトの反乱については Meiggs. JHS. 1943. p. 29. n. 42.

②⑨ Erythrae の条約 ATL. D. 10. 年代については諸説があるが ATL. に従う 453/2年としている。関係史料については

は SEG. X. を参照。条約にはアテナイとその同盟者の為に全力を尽すこと、離反しないこと、ペルシア人を伴った逃亡者を受入れないこと、反僭主たる事等が規定されている。この条約と同じ頃又は少し前に Miletos が反乱を起している。450/49年に規定された条約 ATL. D. 11 ではアテナイの五人の役人が Miletos の行政に干渉している。Barron 論文 (JHS. 1961. p. 1~) 参照

③⑩ Karystos. Hdt. IX. 105; RE. X. p. 2258. S. V. Karystos; Andros. Hdt. VIII. III. Karystos とは Klérroukhai が送られたらう。

③⑪ Plut. Cim. 18. .; Plut. Per. 7.

③⑫ Op. Cit. 11.

③⑬ ATL. III. p. 264. Callias 平和の信憑性についてはまた論争が行なわれているが ATL, Bengtson, Gomme, Wade-Gery は真と認めている。最近の否定説については Stockton. D. 「The Peace of Callias」 Historia. VIII. 1959. p. 61~69 を参照。史料の見通しについては Bengtson. p. 206. n. 2 を参照された。なお Pericles の政治力に関してであるが Cimon の死ぬ前四五〇年代前半には既に有力な政治家として活動していたと思われる。 (Ehrenberg. V. Sophokles und Perikles. München. 1956. p. 94.)

③⑭ ATL. III. p. 276~. Coinage Decree について ATL. D. 14 は 449/8年としている。又 Gomme. I. p. 582 は五世紀中

頃と」 Seltnan. C. Greek Coins. London. 1965. p. 111 は四四九年としている。五世紀中頃の法令と考える説に有力な考古学的証拠として Ronbison. E. S. G. The Athenians Currency Decree and the Coinage of the Allies. Hesperia. Suppl. VIII. (1949) p. 325 へがもたれる。cf. Tod. 67; Matting. Historia (1961) 論文。

③⑤ ATL. II. D. 7.

③⑥ Meiggs. B. D. Wade-Gery. H. T.; JHS. 1962. p. 69 へ。この変化が何時生じたか確定されていないが Meiggs. Wade-Gery は 453/2~448/7 の間と考えている。(Op. Cit. p. 71).

③⑦ ATL. III. p. 294 の解釈による。

③⑧ 第2章参照。

③⑨ Chalcis とアテナイの条約の (ATL. D. 17. 1. 21~31) の試訳「私は言葉に於いても行動に於いても策略や奸計をもってアテナイから離反することはいし又離反した人にも従がわない。もし誰かが離反を唆したら私はその人のことをアテナイに伝える。又アテナイの課する税を払い全力を尽してアテナイの同盟者となり、もし誰かがアテナイ人を害した場合アテナイ人に助力をする。そしてアテナイ人の意志に私は従がう。」注目すべき点は Chalcis の場合 Colophon や Erythrae の場合と異なり同盟者という字が見られずアテナイのみに対して誓約をしている事実である。ここに我々はアテナイが以前より一層同盟国に対して高圧的な態度を取るようになった証拠を見る

ことが出来る。

④⑩ Lemnos, Chersonesos の場合反アテナイ的な動きはなかった (ATL. III. p. 292. n. 89). このことは植民者の素性からみて当然である。第二章参照。

④⑪ Berve. H. Griechische Geschichte. 1² p. 310 へ Kléroutchoi の派遣も又土地獲得が第一の目的であったと見ている。

④⑫ IG. II² 43 = Tod. 123. 1. 20~35. アテナイと同盟国の関係に入った国に対してアテナイは公私に拘わらずアテナイが占領していた土地を返すべしとし、又同盟国内に土地を得ること及び守備隊を送ることを禁じている。さらに 1. 35 以下次の如く定められている。「アルコン Nausinikos 以後、公私のいずれにおいてもアテナイ人は同盟国内に買収又は抵当その他の如何なる手段をもつても家や土地を得たりしてはならない」この条文はアテナイが同盟国内に Kléroutchoi を派遣することを禁じたものと解釈される。Tod. Vol. II. p. 69. Diod. XV. 23. 4; 29. 8; 30. 1 参照。

④⑬ Arist. Polit. VIII. 1321. 1. 5 へ。

④⑭ 三段機船の漕手の中心が如何なる階級の人であったかは議論の存する個所である。Bury. Hist. of Gr. p. 332 は奴隷と傭兵 Glotz. II. p. 358 はメトイコイと奴隷が中心であったとみているが、ペロポネネス戦争当時では Thetes 階級が主力でありメトイコイ、奴隷も使用されていた。しかし、den Kern der Ruderer bildeten stets die Theten (Busolt. p. 575.)

- ④5 Glotz. II. p. 142.
- ④6 Plut. Per. Cim. 15~17.
- ④7 Plut. Per. XI. Meyer. H. D. Thukydides Melesiou und die Oligarchische Opposition gegen Perikles (Historia 1967. p. 141~) は「同盟国支配強化を主張する Perikles に反対する Thukydides」について考えを否定し、後者も同盟国支配と同じの考えの上に立っていたとしている。しかしこの二者がギリシアの政治に常に問題をなげかけた所謂民主派と寡頭派の対立の一つのものであるとみる点には問題は無いと思われる。cf. Frost. 論文(Historia. 1964), Sealy 論文(Hermes. 1956)
- ④8 日当制、及びアルコン制度の改革については Bengtson. p. 193, 建築については op. cit. p. 196~; 同盟金流用については ATL. III. p. 279. 参照のこと。
- Stevenson. G. H. The Financial Administration of Pericles. (JHS. 1924. p. 1~) は同盟金の余剰は四五年同盟金のアテナイへの移行後生じたものであり「any savings were made at the expense of the allies and not of the Athenian δῖμος」のこと。Bengtson. p. 197, French. p. 92~.
- ④9 従がってアテナイ帝国の対外的な人気は余り良かったとは思われず、帝国の性格に関しては Croix 説(Historia. III. 1955/4) よりも Bradeen 説(Historia. IX. 1960) 或いは Quinn 説(Historia. 1964)の方が妥当の様に思われる。実際
- アテナイ人自身が帝国たることを認めていたのである。(Thuc. II. 63, III. 37), Diod. XV. 30. 1 も参照。
- ⑤0 母市と植民市 Apoikia の関係は宗教的な性格なものについてのみ保たれており母市に植民市が従属するものではなかったこと Thuc. I. 34 についての考えは現在の通説でもある。Gwynn. (JHS. 38, 1918. p. 118~); Berve. Gr. Gesch. 12. p. 112; Wilcken. Gr. Gesch. 1962. p. 89~90; Hammond. Hist. of Gr. 1953. p. 112~113; Bury. Hist. of Gr. 1959. p. 87~88; Glotz. I. p. 160. これに対して、植民市は母市に支配されていたものである。Meyer. Ed. Gesch. des Altertums. III. 1954. p. 411; Beloch. I i. p. 232. I. ii. p. 219. したがって Schaefer (p. 364., p. 379. n. 4) も述べている様に余り類型的にみられることは正しくなく、個々の場合に依じて研究するのが正しいように思われる。
- ⑤1 Thuc. IV. 108. cf. Hdt. V. 23. 税の性格に関しては決定的なことは言えない。Graham. p. 200 は港灣使用税の可能性があること ATL. III. p. 309 はアテナイ領地の鉱山収入とみなしている。
- ⑤2 Tod. 44. I. 8~.
- ⑤3 植民市設立指導者の権限については Graham. p. 29~を参照。Brea への植民は四四六年の Plut. Per. XI. に述べられている Bisaltai 族の中への植民と同一視される(ATL. III. p. 287~). 他方 Woodhead. A. G. (Class. Quart. 1952. p. 56

62) は Chalcidice の北西に Brea の位置を置こう。これが正しくならぬ。Edson. Ch. (Class. Phil. 50. 1935) が証明している。cf. Mattingly. (Class. Quart. 1966.) 論文。

⑤4 ATL. III. p. 304, 276~.

⑤4 V AJP. (1948) の Ehrenberg 論文 p. 149~.

⑤5 Op. Cit.

⑤6 ATL. III. p. 252, p. 282~. cf. Gomme. I. p. 344, 376. n. 1.

おわりに

以上本稿で述べた通り Apoikoi と Kléroukhoi の差は母市市民権を失うか否かにあり、即ち失なわないのが Kléroukhoi である。しかしアテナイの場合 Apoikia は初期ギリシア植民にみられるような母市より完全に独立した植民市ではなくアテナイの利害を考慮した上で設立された植民市であり多分に Kléroukhia 的な性格を持っていたものであり、視点を変えればここにアテナイ国家の発展が示されていると云える。

アテナイが Kléroukhia を設立した理由にギリシア史全体に通ずる土地不足、貧困という一面があった事実是否定出来ないが五世紀に於いてはこれだけが原因ではなかった。考慮すべきもう一つの重要な理由はデロス同盟の盟主の地位を得たアテナイが同盟国を支配し隷属化し、アテナイからの離反を防止する機能を所有していたという点である。この点はアテナイの利益を第一に考

えた Pericles の同盟政策と密接に関係していたのであり、Pericles は Kléroukhia という植民市の型に明白な性格を与た人物であったといえる。しかし Kléroukhia 設立という問題は単なる個人に全ての解決を見い出せないことはいうまでもない。本質はもっと深く、上述の Kléroukhos の語源やその性格が示しているように、あの戦士共同体というポリスの根本的な性格に一面は根差していたと考えられるが、これは強ち論理の飛躍であるとはいえない。

Kléroukhia 設立には又自己ポリスを拡大しようとする性格が示されていたという点も注目されねばなるまい。ポリス各々が独立自治を主張し、政治的に統一されることのなかったギリシア世界はペルシア戦争という外からの刺激によりデロス同盟というまがりなりにも一つの「統一体」を形成するに致った。ここに於いて盟主の地位を占めたアテナイは自己の利益の追求の為ではあったが狭いポリスの枠を越えた政治支配を試みた。だがポリスの鞏固な独立性とオリエントにみられる官僚制の欠如によりこの試みも失敗に終わった。確かに失敗した。

しかしアテナイは 405/4 年の帝国崩壊後にもこの種の発展への志向を止めなかったのである。この事実は、第二次アテナイ同盟条約の Kléroukhia 設立禁止条文にも拘らず次第にアテナイは各地に Kléroukhia を設立始めている点から明らかである。これらの Kléroukhia は第一章に述べたように母市アテナイと密接な法的関係に立っていた。無論四世紀以後にみられる制度の整った

Kleroukhia が既に五世紀存続していたかどうかという点は明白ではないが本稿ではこの問題には立入れなかった。この問題はさておき最後にもっと巨視的に六、五、四世紀を展望してみよう。

六世紀既にアテナイは植民活動を行なっており母市アテナイと植民市は密接な関係に立っていたが、Chersonesos への植民に見られる如くまだ個人の役割が大きく、しかも母市は僭主制といういわば特殊な政治状態での植民が中心であった。五世紀になると事情は変り内政的には民主制の確立に反映されているように国家が確立し、外面的にはデロス同盟の盟主になり、植民は前時代とは異なり個人の海外発展のみでなく一ポリスの海外発展という面が大きく押出されることになった。この点は特に Kleroukhia 設立事情に明示されている。

四世紀以後もアテナイは多くの Kleroukhia を設立している。しかし五世紀の場合とは異なり多くは、アテナイ同盟国内部より、むしろ Lemnos, Imbros 或は Scyros の場合の如くアテナイの所有の土地と認められていた地点に設立されている。これら多くの植民者 Kleroukhai は法的にみてアテナイと緊密な関係を保持していたことは第一章に述べた通りである。しかしこの場合視点を變えて見ればアテナイは四世紀三世紀いや二世紀になってもまだアテナイ市民という共同体としてのポリスの觀念に固執していた一面を見ることが出来るのではなからうか。ここに我々は発展とはいいいながらギリシア世界の政治的拡大の一つの限界を認めることが出来るように思われる。従ってこの点に関しローマの

植民活動との比較検討が古代世界の理解に極めて重要と思われるがこの問題は後日機会を改めて検討してみたい。(完)

(前号訂正)

誤 正

(1) 一四一頁上欄、注⑤

·Aθ̃|·vηci

·Aθ̃|·vηci

(2) 一四二頁下欄一〇行目

六世紀末

六世紀末

(3) 一四六頁下欄後より二行目

五〇四年

四五〇年

(4) 一四七頁上欄一〇行目

こがと出来る

ことが出来る。

(5) 一四九頁下欄一三行目

κ̃ηπος

κ̃η̃πος